

物語①

【更級日記】菅原孝標女

かくのみ思ひくんに<sup>かみおもひくんにばかりいる</sup>たるを、心も慰めむ

と、心苦しがりて、母、物語など求めて見せ

給ふに、<sup>なるほど(実際に)</sup>げにおのづから慰みゆく。<sup>『源氏物語』の「若紫」の巻</sup>紫のゆかりを

見て、<sup>見たい</sup>続きの見まほしくおぼゆれど、

人語らひなどもえせず<sup>できない</sup>。誰もいまだ都なれ

ぬほどにて、<sup>見つけることができない</sup>え見つけず。いみじく心もとなく、

<sup>読みたいと</sup>ゆかしくおぼゆるままに、この源氏の物語、一の巻より

してみな見せ給へと、心のうちに

祈る。親の太秦に<sup>太秦寺</sup>こもり給へるに

も、異事なくこのことを申して、<sup>(寺から)出ると</sup>出で

<sup>すぐ</sup>むままにこの物語見果てむと思へ

ど、見えず。いと口惜しく思ひ嘆かるるに、をば

なる人の田舎より上りたる所に<sup>行かせたところ</sup>渡い

**たれば**、「いとうつくしう生ひなりにけり。」など、

あはれがり、めづらしがりて、帰るに、「何をか

実用的な

奉らむ。まめまめしきものは、まさなかり**なむ**。

きつとつまらないでしよう

読みたがつていらつしやると聞いている

ゆかしくし給**なる**ものを奉らむ。」

櫃に入つたまま(一セット)

ざい中将以下は書名

とて、源氏の五十余巻、**櫃**に入りながら、**ざい中将**、**とほぎみ**、

**せりか**は、**しらら**、**あさうづ**などいふ物語ども、一袋取り入れて、

大変な者だったよ

得て帰る心地のうれしさぞいみじきや。

胸をわくわくさせて

はしるはしる、わづかに見つつ心も得

もどかしく

ず心もなく思ふ源氏を、一の巻よりして、人

もまじらず几帳のうちのうち臥して、

何になろうか(いや問題にもならないほど幸せ)

引き出でつつ見る心地、後の位も何にかは

**せむ**。昼は日暮らし、夜は目の覚め

物語③

【更級日記】菅原孝標女

たる限り、灯を近くともして、これを見る

よりほかのことなければ、おのづからなどは、  
(いつのまにか)自然と

そらにおぼえ浮かぶを、いみじきことに思ふに、夢

に、いと清げなる僧の、黄なる地の袈裟着

たるが来て、「法華経『法華経』(仏教の経典)の第五卷五の巻を疾く習へ。」と

言ふと見れど、人にも語らず、

習はむとも思ひかけず、物語のこと

をのみ心にしめて、我は器量(容姿)が良くない者だよこのごろわろき

女盛りになつたなら  
ぞかし、盛りにならば、かたちも限りなくよく、

髪もいみじく長くなりなむ、光の源氏の夕顔、  
(人名)光源氏に愛された

(人名)宇治の大将に愛された  
宇治の大将の浮舟の女君のやうにこそあらめ、

と思ひける心、まづいとはかなく、  
あきれはてた  
あさまし。